

コミュニティー・キャピタルについて

西口 敏 宏
 (一橋大学名誉教授)
 (武蔵大学客員教授)



血縁・同郷縁に基づく商業ネットワーク、あるいは、市場関係のサプライチェーンといった見かけ上の差異を超えて、よく機能するコミュニティーでは、継承され、あるいは、新たに共有された成功体験が成員の間に「刷り込まれ」、その累積から「同一尺度の信頼」が派生し、コミュニティーへの帰属意識が強化されると、面識のない成員間でさえ、積極的に協力しあう「準紐帯」が生まれる。その結果、個人能力の総和とは異なる、特定コミュニティーのみに顕著な環境異変への耐性と成育力のある排外的な「コミュニティー・キャピタル」が叢生され、しばしば長期的繁栄を伴う。

グラノヴェッターの優れた転職研究は、親しい友人ではなく、疎遠だった「遠い知人」が、被験者が現職を得た際に、決定的な情報を提供したことを示したが、その多くは、実は学生時代の友人や、昔の職場の同僚や雇用主として、日々親しく接していた人々だった。つまり、赤の他人ではなく、人生のより早い時期に、親しく交わり、ある意味、互いに信頼関係が「刷り込まれた」人々だった。このような強い信頼の「刷り込み」がある関係は、長期にわたって、そのポテンシャルが活かされることが多い。

ところで、ワッツらのスモールワールド理論の問題点は、ノード（結節点）が均等に扱われるため、現実のネットワークに多く見られる階層性が扱えないことだ。例えば、長期の実証研究に基づいて、西口・辻田（2017）が論じたように、近年、自力で圧巻の経済繁栄を遂げた中国・温州人企業家のネットワークでは、個人のリワイヤリング能力、つまり、情報伝達経路のつなぎ直し能力の差による、各人の交際範囲と多様性においては、明らかにノード間に階層性が見られる。

クラスター分析によって、温州人コミュニティーでは、有能で儲けの上手い「ジャンプ型」がネットワークの中核に位置し、闇雲に行動する「動き回り型」がその周辺に、さらに、受動的な「現状利用型」がネットワークの周縁部に、多く偏在することがわかった。つまり、各ノードの接続数で測定される、ネットワークの媒介中心性では、明白な差が生じていた。

だが、マートンのマタイ効果論やバラバシのハブ優位論にもかかわらず、そうしたノード間の不平等が、必ずしも、究極的にただ1つの巨大ハブのネットワーク体制を生み出すわけではなく、大きなハブが、周辺のより小さなノードを一方向的に搾取して利得を独占するのでもないことが、次第にわかってきた。

つまり、芝居の中心人物はわずかだが、多数の脇役と舞台スタッフに支えられており、皆が一定の役割を演じている。そこでは「階層性」と「共同体志向」が共存し、スモールワールドの視点でいえば、内部凝縮性と外部探索性を兼備するネットワーク構造が見られる。

企業集団や地域共同体といったコミュニティーの特徴は、誰が内部者であり、他の誰が外部者

であるかといった、メンバーシップが明快な点である。例えば、中国・温州の血縁・同郷縁に基づく商業ネットワークに対して、トヨタのサプライチェーンは、経済合理性に基づく行動規範による取引関係と、一見異なるが、その特徴的なつながり構造と運用法において、両者は本質的に共通している。

この種によく機能するコミュニティに属する会員たちは、長年の成功体験の共有によって、内部者として共同体に埋め込まれ、一定のアイデンティティを見出し、深化させている。彼らが仲間同士や、直近の取引先と切磋琢磨し、失敗を乗り越えて、ともに問題解決を図りながら、成功体験を深め、蓄積していく過程で生じる「刷り込み」体験が、集团的繁栄を助長する。

この種の「刷り込み」は、そこに由来して会員間に発生する「同一尺度の信頼」を介して、彼らの間に、汎用的に適用される「準紐帯」、つまり、同一コミュニティの会員であれば、仮に面識がなくても、等しく支援し合う関係性へと昇華し、そこから派生する「コミュニティ・キャピタル」は、さらに集团的結束を堅固にする「強化学習」を促進して、ループを一巡させ、次の新たな循環を生み出す。

この「刷り込み → 同一尺度の信頼 → 準紐帯」という循環過程は、単に個人的な、あるいは、血縁・同郷縁の関係のみに限定されない。

例えば、トヨタのサプライチェーンなど、“非”特殊個人的、“非”血縁・同郷関係に基づく一般的な企業間関係でも、共通のルールや制度が遵守され、その成果が「見える化」して共有される限り、優れた集団パフォーマンスは持続する。

つまり、参加者を結びつけ、集団目的に駆り立てる社会的な仕組みがある限り、地域社会や民族性に根ざした血縁・同郷者からも、“非”血縁者同士のビジネス関係からも、表面の差異を超えて、似通った機能と帰結を伴う“中範囲の”「コミュニティ・キャピタル」、つまり、同一コミュニティの会員間で交わされる関係資本が発生し、その共存共栄を促進するのである。

表は、そうしたコミュニティ・キャピタルの観点から、“中範囲”の分析単位である「コミュニティ」を、「個人」あるいは「社会全体」から明確に区分し、再整理した概念的見取り図である。

表 コミュニティ・キャピタルの位置づけ

	ヒューマン・キャピタル	コミュニティ・キャピタル	ソーシャル・キャピタル
分析単位：	個人	コミュニティ	社会、国家
信頼：	特定化	同一尺度（均一的）	普遍化

コミュニティ・キャピタルは、従来のソーシャル・キャピタル概念の曖昧さと適用上の問題点を克服し、これまで必ずしも的確に分析されてこなかった、境界が明確な中範囲のコミュニティ、しかも、特定の地域や血縁・同郷者に依拠するものから、より一般的な企業間関係などを含む、広範なアクターからなるコミュニティの営みを、適切に分析するための共通概念であると想定される。

目に見えないが、手に届く範囲の関係資本が駆動するものであるからこそ、そうした実践的で“生きた”ネットワークの運用方式は、累積的進化を伴って、的確に集団目的を果たすのである（詳細は下記の文献を参照）。

西口敏宏・辻田素子『コミュニティ・キャピタル論』2017年 光文社新書